コラム

「不易」研究と「流行」研究

工業化社会が終わり，高度情報化社会に移りつつあるという話をよく耳にする．工業化社会とは一体何であつたろうか．物の価値が物以外のものに比べて相対的に低くなつていつた時代と言えなくもない．例えば，白黒テレビが初めて売り出されたとき，新入社員が給与を2年間飲まず，食わずためても，それを買うことはできなかつた．現在は生活必需品と目される物は誰でも容易に手にすることができる．物によつてはほとんど使用されることのない機能を多数備えている．

物質的に満たされたそのゆとりが価値の多様化の引き金になつている．大部分の人が中流だと思つているのはほしい物が容易に手に入る，成熟した物社会であることの証しだ．

精神が物の後を追いかけるのは宿命みたいなものだ．物の速度がはやすぎると精神がついていけなくなる．工業化が急であつた時代には若者の疎外感が大きな社会問題であつた．そういう意味では，現在は重厚長大社会が成熟しているので，精神的に一息ついてもおかしくない時代だ．そのような目で眺めると発展途上時に蓄えられたストレスが解放され，何となく社会に余裕が感じられなくもない．

しかし，人間は既に本能から大きく離れた存在になつているので，変化に乏しい，停滞したように見える社会に対しても不安を感じる．そこから抜け出そうとしてエネルギーが高くなる．それが新しい科学技術を生みだす駆動力だ．

人間は直接見ることができる自然から想像した飛行機や船などほとんどの物を作つてしまつた．また人間が日常の生活を営む上で必要と考えた多くのものも作つてしまつた．自然界に存在しないものから何かを空想してそれを作るということはない．しかし，人間の目より高性能な目を備えた機器が次々に開発され，今まで見ることができなかつたものが見えるようになつてきている．先の見えない時代だとよく言われるが，この辺に新しいニーズやシーズが生まれてくるヒントがあるはずだ．

研究に携つている人間は常に先を読まなければならないが，そのためには歴史的視点が要求される．私たちにとつて風化したものを歴史的に評価することは比較的容易であるが，現在を歴史的に把握することは容易ではなく，ましてや未来を正確に予測するには神の力が必要だ．だから，どのような時代であれ，研究には時代を超越した「不易」研究と時代に即した「流行」研究があるべきだと，私は思う．

いずれの研究を行うにせよ，一つの大きな時代の節目で何を研究すべきかを考えることは，研究者にとつてはこの上ない贅沢だ．

(金属材料技術研究所筑波支所　角田方衛)

編集後記

編集委員になつて半年，審査する側からの難しさを感じている．

ひとつは表現の仕方の善悪に関する判定基準についての悩みである．ご存じのように本誌では，著者の投稿した原稿はまず校閲者に回つて指摘事項を挙げていただく．これを基に，最終的に編集委員の一人である査読者が判断して著者にいくつかの事項の修正をお願いする．この指摘事項が数式展開の誤りとか，論理上の誤りなら話は簡単である．問題は，校閲者が論文をわかりやすくするため，ここの所はこのように書いたほうが良い，という指摘の場合である．たいていは査読者もなるほどとその指摘に賛同する．しかし，校閲者が異なる別の論文では，同じ表現が指摘を受けるとは限らない．このとき公平な審査という立場から同じように修正をお願いするか，取り立てて指摘するまでもなしと判断するかが悩ましい．実際には定形の言い回しを除き，指摘しないことが多い．修正したものが，唯一最良の表現とは思えないからである．

いまひとつは，より根本的な場合で，著者が得たとする新規な知見が妥当な実験ないし解析に基づくものであるか否かの判断である．つまり，実験手法ないし解析手法がその結論を得るのに正しい方法か，誤りかを証明するには今後さらに研究を積まなければならないという場合である．「鉄と鋼」は学会誌であるので内容には正確を期したい．この点に関して本編集委員会では，実験条件や解析の前提条件を明示して，この条件下でこういう結果を得たという表現に修正していただいている．

最近，酸化物系でより高温の超伝導材料が得られていることは，常識の恐さを教えてくれた．「鉄と鋼」にも常識を打ち破る新規な知見が続々と載ることを期待する．編集委員会は「疑わしきは罰せず」の方針をとつている．(S. T.)